

**\*ブラッシャー天体写真儀の乾板画像取り込みーその1ー (526~1127)**

アーカイブ室新聞第482号(2011年5月11日)「ブラッシャー天体写真儀による天体写真乾板についてーその1ー」、第483号(2011年5月19日)「ブラッシャー天体写真儀による天体写真乾板についてーその2ー」、第484号(2011年5月20日)「ブラッシャー天体写真儀による天体写真乾板についてーその3ー」、第485号(2011年5月24日)「ブラッシャー天体写真儀による天体写真乾板についてーその4ー」、第486号(2011年5月25日)「ブラッシャー天体写真儀による天体写真乾板についてーその5(乾板の箱)ー」と5号にわたって東京天文台(国立天文台の前身)の三鷹構内にあったブラッシャー天体写真儀による天体乾板のリスト作りの報告をした。

これらの乾板については元国立天文台職員の中村士氏によって別にリストが作られており出版もされ、その一部は現在、マシンリーダーでもある。しかし、画像としてデジタルデータとしては取り込まれていない。

今回は、試験的にこれらブラッシャー天体写真儀による乾板のデジタルデータとして、特段の経費をかけないで取り込む手間について見当をつけるため作業を行ってみた。中村士氏による整理されたブラッシャー天体写真儀の乾板の箱は141個あり、基本的には1箱に30枚の乾板が収められている。

そのNo.001の箱に入った乾板番号No.526~No.1127の30枚について二通りの取り込みを行ってみた。1つは、スキャナー(CanonScan9950F)によるネガフィルムを取り込むソフトを使ってキャビネサイズ(9.11×12.0cm)の範囲を600dpiで取り込む方法と、新製品のスキャナー(CanonScan9000F)による文書のグレースケールで六つ切り全(16.4×21.4cm)範囲を600dpiで取り込むソフトを使った方法でやってみた。市販のスキャナーではネガフィルム・ポジフィルムを取り込むにはお仕着せのフレームを使わなければスキャナーが走らないのでキャビネ版の取り込みが出来る古いスキャナー9950Fを用いた。また新製品の9000Fはスピードは速いが6×6版フィルム用の取り枠しか用意されていないので文書のグレースケールで取り込んでみた。

9950Fを使った六つ切り写真乾板の中央部のキャビネサイズ分を600dpiで取り込むのに30枚の乾板で約45分を要した。これは六つ切り乾板の面積のほぼ1/4しか読み込んでいない。新製品の9000Fでは六つ切りサイズを600dpiで30枚の乾板を読み込むのに20分で読み込めた。スキャナーで読み込むだけの時間では作業が出来ているわけではないが一応の目安にはなる。この時間ならばそれほどしり込みをするほどの作業量ではない。

どちらの方法がいいかはこれから検討して見るが、9000Fを用いて六つ切り乾板の全範囲を読み込んだ方がいいと考えている。写真1が9950fスキャナーを使って読み込んだサム

ネイルである。



写真1 9950Fによる読み込みのサムネイル

このサムネイルでは、画質の判断は全くできない。もっともこのプリント上で評価する必要はなく、デジタルデータとして保存されているから、それを読みだして画質を見ればいいわけである。どんな天体が、あるいは興味深い天域を選んだわけではなく、今後の作業の第1弾として最初の30枚を取り込んでみた。写真2がNo.526の画像である。



写真2 9950FによるNo. 526の画像

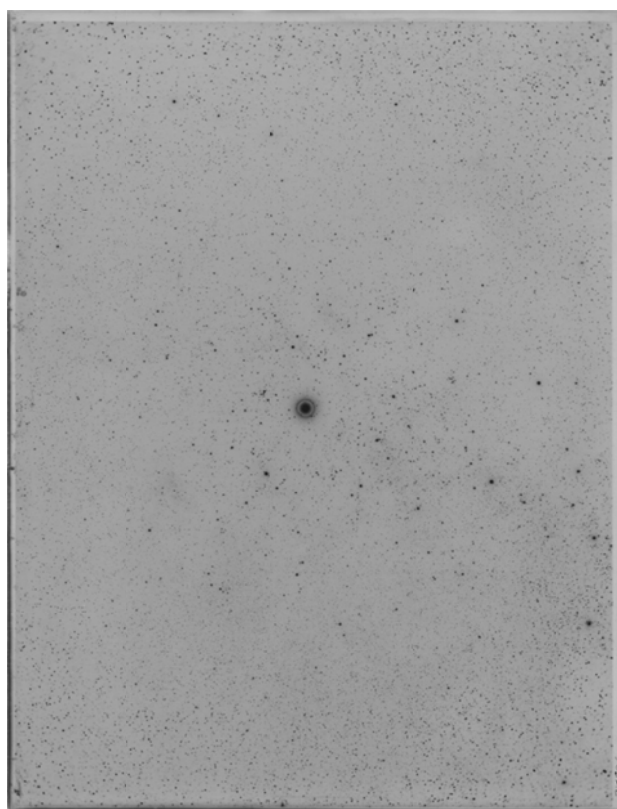


写真3 9000FによるNo. 526の画像

写真 3 が 9000F を使って文書のグレースケールで六つ切り全領域を取り込んだ画像である。取り込んだ領域を同じサイズでプリントしてあるので 9000F による画像写真 3 は写真 2

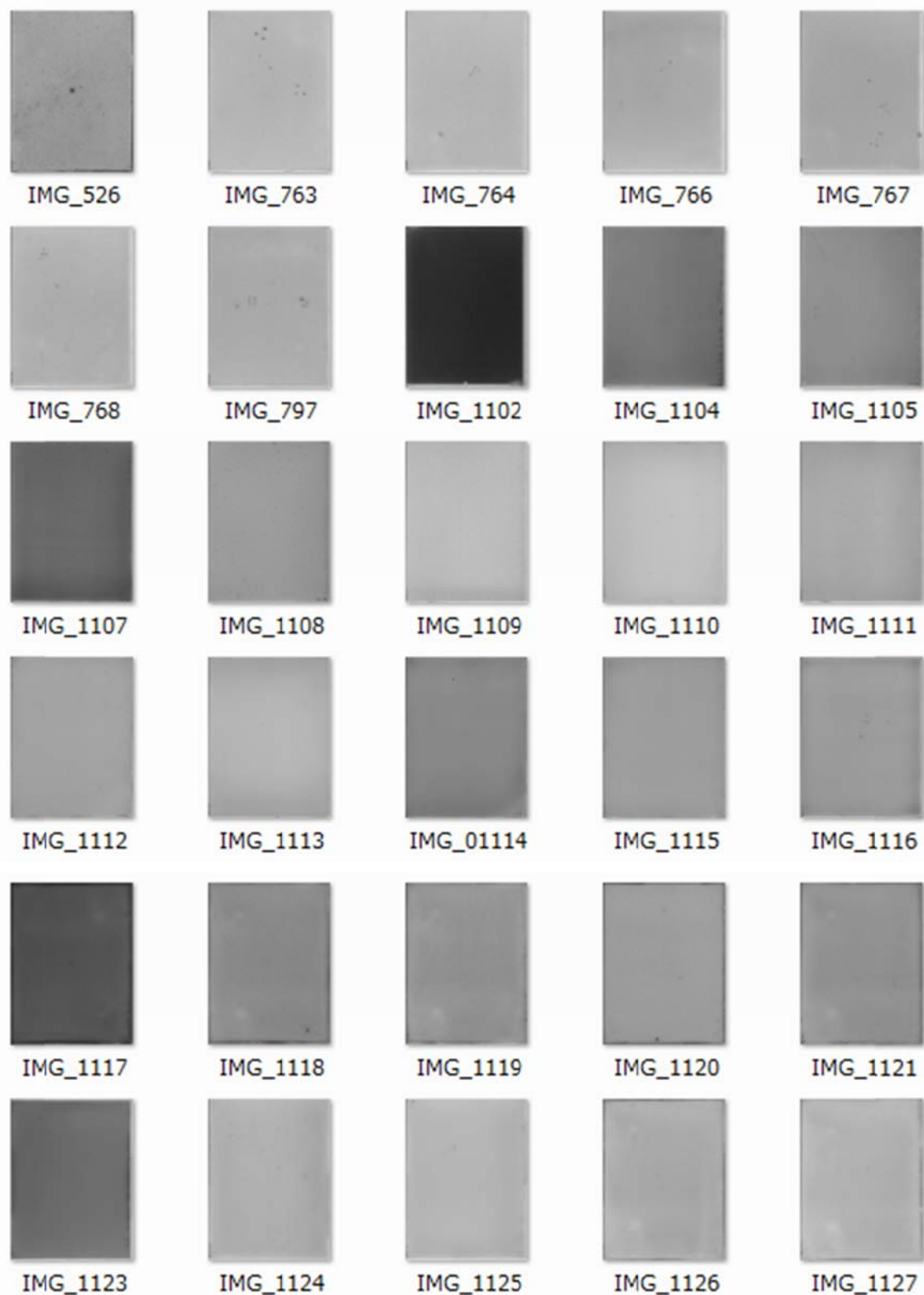


写真 4 9000F で取り込んだ画像のサムネイル

の約2倍の領域を含んでいる。9000Fで取り込んだ画像は文書として取り込んだからボジの状態に取り込まれている。

今回のこの報告のサムネイル画像で評価をすることはできないが、文書のグレースケールで読み込んだBH1108の例を載せておく（写真5）。



写真5 9000FによるBH1108

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)